

Title	ライフヒストリーにおける記憶と時間
Sub Title	Memory and time in life-history studies
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1996
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.1 (1996.) ,p.67- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19960000-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ライフヒストリーにおける記憶と時間

Memory and Time in Life-history Studies

有 末 賢

1. はじめに

生活史研究の重要性について、筆者は、今までにさまざまな角度から考察してきた¹⁾が、ライフヒストリーにおける時間と記憶の問題は、社会調査としての生活史調査の観点と分析や解釈を主題とするアイデンティティ論の双方から関心を払う必要のある問題である。つまり、口述の生活史を構成する語り手と聞き手の相互作用関係、インタビューの場面における時間や記憶の問題は、質的な調査行為の根幹をなす課題であり、質問紙などを用いた標準化された量的社会調査では、被調査者とのゆったりとした時間の共有や記憶を呼び戻す作業に付き合うという事はなかなか成り立たないが、生活史調査では重要な検討課題でもある。また、記憶と「語り」との関係は、ライフヒストリーや自伝、伝記などを分析・解釈していく際にも、大きな問題点となる。特に、精神的外傷体験や内面の屈折を伴っているライフヒストリーにおいては、「語り得ぬもの」を見つめていくことも重要な解釈の課題であると思われる。

したがって、ライフヒストリーにおける記憶と時間の問題を、生活史調査の場面と自伝や生活史研究全体の分析・解釈の場面に分けて考察してみたい。生活史の調査場面においても、日記・手紙などのライフ・ドキュメントと対比される自伝や伝記などの回想の作品化においても、時間の持つ意味は多様であり、詳細に検討する価値があるものと思われる。また昨年、日本においても話題になったクロード・ランズマン監督の映画『ショア』におけるホロコースト体験の「証言」をめぐる問題や従軍慰安婦問題などの記憶と「語り得ないもの」についての問題も、ライフヒストリーにおける時間論と関連している。インタビューを通してのライフヒストリーのなかの時間については、小林多寿子が、クロノロジカルな時間、ライフサイクル的な時間、歴史的な時間、＜現在＞という時間、個人的な時間という区別を提起している。（小林 1995 a）それらについても、ライフヒストリーの構成と作品化の観点から再考察してみたい。つまり、時間と意味の重層性から分厚い記述²⁾としての個人のアイデンティティの問題へと展望していきたいと考えている。しかし、時間論に入っていく前に、生活史研究の現在を関連概念の説明からざっと見ておくことにしたい。

2. 生活史研究の現在

(1) “ライフ”と「生活」のはざままで

生活史という用語は、日本の研究領域の中でも未だに定着しているとは言えない。『新社会学辞典』（1993年）の中で、筆者は次のように「生活史」を定義してみた。

基本的には、個人の生涯を社会的文脈において詳細に記録したものをさす。しかし、日本語で「生活史」という場合、歴史学・民俗学の分野などから、集団や地域全体の「生活の歴史」と言う意味で用いられることもある。英語におけるライフ・ヒストリーは、個人の一生（人生）を個性記述的アプローチによって描いていくことをさしている。したがって、生活史という概念は、ライフ・ヒストリー、個人史・事例史、個人的ドキュメント、ライフ・ストーリーなどの関連概念や派生概念を含む包括的な概念である。（有末 1993 a, 832頁）

社会学や文化人類学の領域では、1970年代くらいからライフヒストリー研究が再び注目されてきている。これは、人間の総体性、全体性を見つめ直そうとする人文主義的な傾向の現れであるのかもしれない。したがって、社会科学としての構造主義、機能主義の枠から一歩飛び出して伝記研究や文学批評、あるいはフェミニズムなどの動きと呼応してくるライフヒストリー研究も出始めている。しかし、ひるがえって日本ではライフヒストリーが「生活史」と訳されるために、しばしば「生活の歴史」ないしは「生活状態（生活水準）の歴史」として理解されることも多い。

日本語で「生活」という場合、まず第一に思い浮かぶのは「衣・食・住」という三領域での「人の暮らし」ということであろう。こうした領域が、近代においては直接、市場経済や資本主義経済に巻き込まれるために、現代のわれわれにおいては、「生活力」とか「生活が難しい」とか言う場合、すなわち「生活＝働いて稼ぐお金」と言う理解がなされているのである。もちろん、ライフの意味は、人間の生涯の全体性を示しているのだから、その中の重要な要素として、労働や生計や経済生活も含まれているのであるが、「人はパンのみにて生きるにあらず」という格言のとおり、ライフヒストリーは当然のごとくその人の「生活水準の歴史」ではない。

しかし、近年の「生活の質」（quality of life）への注目、「豊かな社会」のなかでの人生の生きがいの追求などに見られるように、日本においても伝記や「自分史」が流行になりつつある。³⁾このように、「生活」から“ライフ”への用語の変化は、視角（パースペクティブ）の変化をも示しているのかもしれない。

(2) ライフヒストリーの宇宙 (cosmos)

そこで、生活史の社会学的定義について、個人史、事例史、ライフ・ストーリー、伝記などの関連概念、派生概念をもう少し深く検討してみよう。図1で示したのは、生活史の

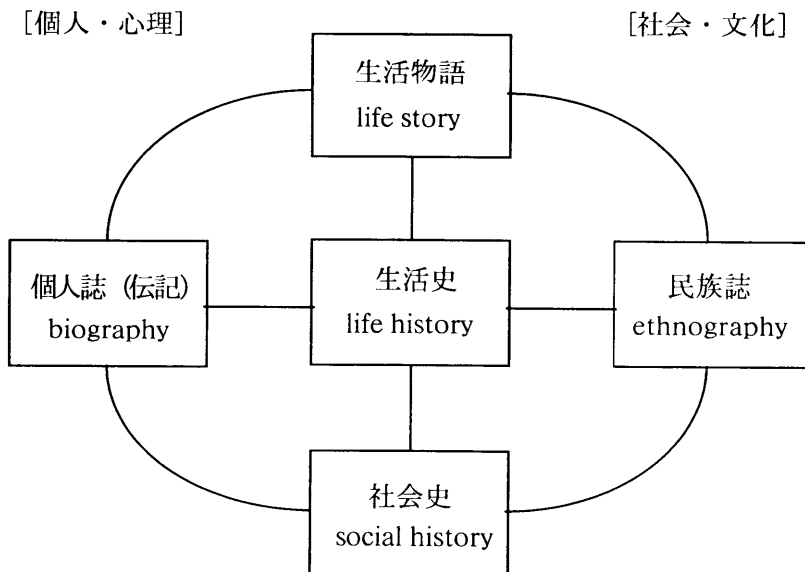
布置連関 (configuration) を表したものである。この図からライフヒストリーの宇宙について考えてみたい。生活史 (life history) を中心にして、四方に社会史 (social history)、個人誌 (伝記 biography)、民族誌 (ethnography)、生活物語 (life story) を配置している。

まず第一に、社会史と生活史との関連であるが、社会史的な把握の根底には、単にある個人の生活史が、その生きた時代の社会史を基底としているという意味だけではなくて、歴史の支配的な構造様式から排除される民衆の歴史、人間関係の深層的な歴史こそが重要であるという考えが存在している。佐藤健二はこの点について、次のように述べている。

社会史は「いま・ここ」に生き残った人間のための「社会」を、生活を作り上げている有形・無形のモノとの関係という自然史的な回路にひらくことによって、精神分析が対象としたような人間関係をさらに深い「人と人との関係の絆が結ばれる」場へと措定しなおす。そう押さえてくるとき、社会史を近代社会の「集合無意識」という理論的対象を持ち、社会現象の連関が帯びる「意味表現」の二重性を解読する試みという形で把握することが出来るのではないだろうか。(佐藤健二 1984, 211頁)

このように、社会史における「隠された関係」あるいは「隠された構造」の解明という課題は、口述史 (oral history)、生活史、そして生活物語 (life story) の手法を介して説き明かされることもある。

図1 生活史の布置連関 (configuration)



生活物語 (ライフ・ストーリー) とは、本人の口述にしる、自伝にしる、あるいは調査

者がインタビューしたものにして、対象者の人生の一部が、ある種のまとまりを持ったストーリーとして展開されている作品をさしている。したがって基本的には、「人生上の出来事」(life event)に対して、ある一定の時間的経過の後に、本人の意味付けが加わり、記憶の取捨選択が行われたものである。その中には、事実と相違した虚構や創作も入り得る余地があるが、その可能性も含めて対象者の主観的世界、内面的世界を明らかにしているという観点から、「自伝的真実」の「物語性」を強調する立場も存在している。⁴⁾つまり、個人の主観的現実やアイデンティティ論から「語り」の物語性ととともに、「人生の物語」としてのストーリーに重要性を置く立場である。

次に図1の中の生活史を中心とした横の布置連関を見ておくことにしよう。生活史研究は、従来からの先行研究の流れの中では、歴史上の有名人やエリートの生涯を、後世の著述家が客観的資料をもとに再構成した伝記(biography)や、著者と話者が同一である自伝(auto-biography)と関係づけられてきた。しかし、生活史との関連で見ていくならば、むしろ、「民族誌(ethnography)」との関連で、biographyを「個人誌」と訳した方が適切ではないかと思われる。エスノグラフィについては、民族学、文化(社会)人類学の分野では、相当の蓄積があり、その方法論についての議論も盛んである。⁵⁾しかし、個人誌については、生活史、あるいは個人的ドキュメント(personal document)との関連で言及される程度であり、少なくとも日本においては、歴史上の有名人やエリートを対象としている「伝記」の領域とは、あまり交流が図られてはいない。今後、ルポルタージュ、ノン・フィクションなどのジャーナリズムの領域からも、個人誌、生活史などの社会・文化的領域への関心が広がるものと期待されている。

また、図1を全体としてのサイクルとして眺めてみると、左側の社会史—個人誌—生活物語の関連は、主に「個人・心理」の側面を考察しており、それに対して、右側の社会史—民族誌—生活物語のラインは、「社会・文化」の側面を中心においている。このような「個人対社会」の図式は、個人的側面と類型的側面が分かち難く結び付いている現実場面での生活史研究においては、あまり意味を持たないかもしれない。一言で言うならば、ライフヒストリーの宇宙とは、バイオグラフィとエスノグラフィの間、そして物語と史実との間に布置しているということになろう。そこで次に、生活史調査における時間と記憶の問題に移っていかう。

3. 生活史調査における時間と記憶

(1) 語りによる「記憶の生成」

口述の生活史(oral history)を構成するインタビューにおいて、語りと記憶との関係は重要かつ微妙な問題である。まず、話者を設定する際に何歳ぐらいの対象者を選ぶのかということも語りと記憶の関係に影響してくる。当然、ある人の生涯にわたる生活史を聞き

たいという場合には、高齢者が対象となることが多いが、現在から遠くの過去の場合には、記憶はしばしば曖昧になることが多い。しかし、誰にでも記憶の鮮明な部分というものがあり、繰り返し語られる場合も多い。それに対して、比較的若い人を対象とした場合には、記憶は鮮明かつ詳細にわたることもあるが、その意味付けが将来変わってしまうことも予想されるのである。

しかし、記憶と忘却との相互関係は、認知心理学がモデル化するような「記憶の量は時間経過に反比例する」というような単純なものとは言えない。岩井洋は「想起すること」と「語り」を通してライフヒストリーにおける記憶の問題にアプローチしている。彼は次のように述べている。

「想起」が「現在」という場を通して生成し、そこでは過去が現在の状況と未来への予期に条件付けられて「制作」され、今度は「制作」された過去が未来を方向づける創造的行為であることを、社会的あるいは集合的な想起を中心に見てきた。想起が過去を「制作」したり未来を方向づける、などという考えはひどく奇異なことのように聞こえるかもしれないが、今までわれわれは、あまりにも記憶の「オリジナル」にとらわれすぎてきたのではないだろうか。つまり、記憶は「貯蔵」されていて、取り出せばまた同じものが出てくると。しかし現実には、人間の遺伝子に刻まれた記憶の痕跡を読み取る装置でも発明されない限り、現時点では記憶の「オリジナル」など措定できないのではないだろうか。過去の出来事Aは、想起されるときにはXにも α にもなりうるのである。想起という行為が歴史の再構築をも可能にする創造性をもつように、記憶を「貯蔵庫」の中に凍結してしまうのではなく、個人的なものに限らず社会的条件との関連で、想起のたびに「生成」されるものとして、今後とらえ直していく必要があるだろう。(岩井 1992, 201頁)

このような記憶の「貯蔵」モデルから「生成」モデルへの変換は、生活史調査においては、「語り」による記憶の生成という調査者－被調査者の相互関係による「共同制作」という次の問題へとつながっているのである。確かに、岩井がいうとおり、「共同想起 (collective remembering)」という「語り」の場面においては、記憶の「貯蔵庫」モデルではなくて、記憶の「生成」モデルが適切であるが、しかし、個人が「何を思い出して何を忘れていくのか」という点は、現在時点の影響や聞き手との「共同制作」という側面も存在しているが、それでも「経験」や「体験」の質に関係している。つまり、個人にとっての出来事の「意味」が、忘れられない性質のものにしているわけである。ある意味では生活史調査における「語り」という表面上の「事象の流れ」においては、確かに記憶は生成されている。しかし、個人的体験の記憶すべてが語られているわけではない。「語られない記憶」は忘れ去られているわけではなくて、ある「貯蔵庫」に一時的に蓄えられているとも言える。記憶が「語られるための時間」もまた必要になってくるのである。確かにある種の記憶は時間の経過とともに忘れられていくため、早くインタビューしておかなければ

ればならないこともあるが、逆にある種の記憶はインタビューを受け入れるためには、かなり長期の時間的経過を必要としている体験もある。前者の例としては、事件の「目撃証言」のような客観的事実、個人が第三者としてかかわっているようなケースが考えられるが、後者の場合には、逆に事件の渦中の人物の場合（戦争体験、アウシュビッツ体験、被害体験、「従軍慰安婦」体験、突発死による遺族など）には、その体験の直後には、ジャーナリストと言えどもロング・インタビューは行えない場合が多い。それでは、生活史調査が行える時点、すなわち「現在」を共有しているという時間について次に考えてみたい。

（２）現在による過去の「意味付け」

「現在」という時間は、常に動いていて、「未来」という時間を「過去」という時間に変えていく変動力を伴った時間である。したがって、現在は過去からも未来からも相当な圧力を受けている。過去からの圧力が強ければ、現在はノスタルジーや自己正当化やあるいは悔恨やトラウマ（心的外傷体験）に支配されることになるし、逆に未来からの圧力が強すぎれば、夢想癖や楽天主義、刹那主義、不安過多などの傾向を持つかもしれない。しかしそれにもかかわらず、現在による過去への意味付与という営みも絶えず行われているのである。この場合の現在という時間は、＜いま、ここ＞と言い換えてもよいが、話者が置かれている現在の社会・文化的位置や状況のことである。質問紙調査の場合には、フェイス・シートにおいても、さまざまな質問項目においても、このような個人の家族・親族関係、社会関係、集団加入や参加、地域移動や社会移動などについて聞かれることが多いが、生活史調査においては、意外と面接の初期段階で聞かれていないとそのまま聞き忘れていることもある。ライフヒストリー研究者は、個人を取り巻く社会関係やネットワークの観点からも現在時点の話者の客観的状況を知っておく必要がある。

そしてまた、現在という＜いま、ここ＞は、現象学的な意味でも重要な時間の一様相である。現象学的に言うならば、「現在」は事象の存在を知覚できる唯一の時間意識である。当たり前のことだが、「過去」は「存在した」という過去形でしか語れないし、「未来」は「存在するだろう」と言う推定の形でしか語れない。だとするならば、過去の自己を語っていても結局は「現在」の自己を語っていることなのであり、現在の自己こそが存在を主張できる唯一の時間形式となる。生活史調査においては、調査時点の被調査者の年齢や調査期間、調査者と被調査者の出会いのきっかけや調査者の調査動機、親密度、あるいは調査者自身の年齢や個人的状況までもが重要な情報になるのは、現象学的な意味での「現在という時間の共有」が意味を持っているからなのである。

（３）聞き手による「時間の共有」

生活史調査における時間と記憶についての第三の問題は、聞き手（調査者）による「共同想起」という点である。口述の生活史は、自伝とは異なって話者が自発的に話すとはいっても、聞き手による「問いかけ」を挟む場合が多いし、問いかけがほとんど無い「問わず語り」の場合も、聞き手の存在が意識されていることは疑いえない。確かに、中野卓の場

合は、「私は初めの挨拶と初めの問いかけ以外、いつも、ほとんど発言の必要がありませんでした。話は、問わず語りに展開し、私はほとんど問を重ねる必要もないほどでした。」

(中野 1977, 2頁) とか「調査の趣旨、目的、方法などは、すぐにわかって下さり、後は、『幼いころのお話しかから』、と言うだけでよかったのですから、腕ききの搗き手が幾日も休みなく搗く餅の、私は臼取りする役目でしかないような調査者でした。」(中野 1983, ii 頁) と述べているように基本的には、調査者＝「黒子」志向が強調されている。⁶⁾ それに対して、前山隆の『ハワイの辛抱人―明治福島移民の個人史』に登場する渋谷正六と前山との関係は、かなり違ったものである。前山は、「われわれの間に交わされた対話は、単なる面接でも聞き書きでもないし、口述でも口伝でもない私は了解している。」(前山 1986, 286頁) と述べている。つまり、語り手の渋谷と聞き手の前山という関係だけではなかったということである。前山が質問して渋谷が答える、渋谷の主観的解釈の口述を前山が機械的に記録し、テープ起こしをし、文字化し、編集したというものではなかった。主題は渋谷のライフヒストリーであり、彼の生きざまであり、それについての彼自身の解釈であるのだが、前山によると、「まず始めに私が語りかけ、どんな話をしたいのかを念入りに説明し、私のブラジルでの体験やハワイにおける他の日系人との対話の具体例を話すことをとおして、渋谷の自己史解釈への触発剤を浴びせかけ、語りへの意欲をけしかけ、そそのかした」(前山 1986, 287頁) というわけである。

ここで注意しておきたいのは、「自己史解釈への触発剤」という点である。前山自身が語る移民の「自己史」は、もちろん渋谷のものとは一致していないはずである。しかし、あえて調査者が自分の観点を明示化することによって、相手の「自己史解釈」を展開させようとする意図が込められている。これは言うまでもなく、「両刃の剣」になりうる。つまり、前山自身が述べているように、「聞き手である私の視点によって語り手の視点をおおいかくし、それをねじ曲げるようなことは最大限にこれを避けるよう努力した」(前山 1986, 287頁) というわけであるが、「触発剤」となるということは、他の化学変化を引き起こす可能性もはらんでおり、「これを避ける努力」は文字通り「保証のない努力」にかかっているのである。このように中野卓と前山隆のライフヒストリー調査の仕方は、それぞれの個性を反映してかなりスタンスの異なったものになっている。しかし、共通して言えることは、聞き手が話し手と「時間を共有している」という構図である。これが、ある時は「傾くだけのカウンセラー」にもなり、ある時は「けしかける挑発者」にもなり、またある時は「意見を言う対話者」にもなるというわけである。

(4) 語り手による記憶と時間の秩序

この点は、「回想・想起とストーリー構成」の問題と関係しているが、語り手が記憶している時間の秩序と語りにおける時間の秩序の相違という点が第一に表面化してくる。小林多寿子は「インタビューからライフヒストリーへ」において、次のように述べている。

結局、ライフヒストリーは、五つの時間が設定されて組織されたものである。まず、インタビューの場であり、過去の経験が想起された④<現在>の時間において、「人生」が語られている。その「人生」を構成したライフヒストリーは、<現在>を準拠点としている。ライフヒストリーを構成する際、①<クロノロジカルな時間>、②<ライフサイクル的な時間>、③<歴史的な時間>という三つの時間は、語られた人生を解釈するのに欠かすことのできない時間である。つまりライフヒストリーの「構成」や「編集」は、これらの時間を指標としたからこそ可能になっている。しかしこれらの時間をもとに作成された「出来事のクロノロジー」だけがライフヒストリーではない。語られた「人生」に流れる⑤<個人的な時間>がどのようなものであるかが表現されてこそライフヒストリーとなる。ライフヒストリーを構成することは、<個人的な時間>をとらえ、底を貫くさまざまな「意義」を解釈しようとする行為であるといえることができる。ライフヒストリーは、語り手に固有の<個人的な時間>が理解可能になるように構成されたものなのである。(小林 1995 a, 66-67頁)

小林はインタビューから出発する時間順序に従って、④<現在>という時間をまず最初に挙げているが、インタビュー・テキストのなかの時間として、西暦や元号年、年齢などの編年体で表現できる①<クロノロジカルな時間>、誕生や結婚など人間のライフサイクル上の通過する出来事としての②<ライフサイクル的な時間>、そして戦争や不景気などの社会的出来事が時間経過の中で言及される場合の③<歴史的な時間>の三つがひとかたまりになる。これらを小林は「a. 語り手と聞き手が他者ととともに共有できる時間」としている。それに対して、④<現在>という時間は、「b. 語り手と聞き手の二者だけがもつ時間」とされており、さらに⑤<個人的な時間>とは、「c. 語り手だけがもつ固有の時間」とされている。

確かにインタビューからライフヒストリーへの変換に際して、小林が述べているような「時間の流れ」が存在している。小林は「唯一の媒介者である聞き手は、本来、<個人的な時間>であるものを、ライフヒストリーという他者にも理解可能なものに組み替えて、秩序づけていこうとする。インタビューからライフヒストリーへという語り手と聞き手のあいだですすむプロセスは、『人生』をひろく他者にも理解可能にするための変換の作業なのである。」(小林 1995 a, 68-9頁)と述べているが、これは生活史調査一般において正当な時間関係である。しかし、あえてその先の話に触れてみたい。つまり、話し手の時間秩序や聞き手の時間意識などのいわゆる<個性>の部分がどのようにかわってくるかという点である。例えば、第一に「語り手の「時間の基準点」は何か」という問題を提起してみよう。前述した岩井洋が言及している、記憶の「回帰点」とも関連しているが⁷⁾、語り手が自らの生きた過去を語るときに、重要な柱になっている時点、あるいは何の話をしていても「その話」に戻っていく時点、あるいは時間が逆流するように、そこまでの話が強調され、それ以後の話が茫漠とかすんでしまうような時点というものがある。それ自

体はクロノロジカルな時間でも語れるし、ライフサイクル的な時間でも語ることができる。あるいは多くの場合には、歴史的な時間とも何らかの関連を持っているという事もあるだろう。しかし重要な点は、その「基準点」なり「回帰点」なりは、紛れもなく「主観的な時間」＝「生きられた時間」に属しているという点である。ライフストーリーの眼目が、主体的に生きたストーリーの採取にあるとするならば、語り手固有の「記憶の回帰点」＝「時間の基準点」を捜し出すことを第一の主題とするという考え方もある。もちろん、これに付随する問題として、語り手と聞き手が共有する時間である〈現在〉という時間が言わば「前提としての時間の基準点」になっている、という点がある。したがって、ライフヒストリー研究においては、語り手が自らの「生きられた時間」にすぐに没入していくとしても、聞き手はそれを語っている〈今、ここ〉という時間を考慮に入れなければならないし、読者も聞き手（＝調査者）の存在と現在という時間の枠組みを考慮に入れておかなければならない。

第二に、ライフヒストリー構成者は時間秩序をどのように考えるのかという課題も存在している。つまり、インタビューからライフヒストリーへの構成段階において、語り手と聞き手（ライフヒストリー構成者）との合成において、作品が制作されるわけである。一般的にライフヒストリー調査は、①語り手との出会い、②インタビューの順序、③「薄い記述」から「分厚い記述」へのライフヒストリー、④「伝記」的な時間への整理というように展開していく。しかし小林も述べているように、ライフヒストリー構成者は「他者と共有できる時間」すなわち読者に対していかに理解可能な形でテキスト化していくのかという課題を担っているのである。そこで、インタビューにおいて駆使したクロノロジカルな時間に従って、編年体で記述した方が理解しやすいか、また、ライフサイクル的な時間を主要な時間軸として「伝記」として記述すべきか、あるいは、社会史や時代への「証言」として「歴史的な時間」を中心に記述するのかという作品化の形態とも関連してくるのである。⁸⁾ ライフヒストリーの宇宙が、エスノグラフィ（民族誌）とバイオグラフィ（個人誌）の中間に、そしてヒストリー（事実）とストーリー（物語）の中間に位置している、と述べたのはこのようにライフヒストリーの構成自体が相対的に位置付けられる布置連関の中に存在しているからなのである。そこで、次に記憶と「語り得ぬもの」との関係について、口述の生活史と自伝⁹⁾とを対比しながら考察していきたい。

4. 記憶と「語り得ぬもの」

（１）「重要な意味」と「重要な意味喪失」

今まで生活史調査における時間と記憶の関係について見てきたが、ここで、自伝における時間と記述の観点とのある種の対比が見いだされてくる。すなわち、口述の生活史などのインタビューを中心としたライフヒストリーの構成においては、基本的に語り手の「語

り」に信頼を置いている。したがって、記憶と語りは、ある一定の相互関係のもとで流れている川のように位置づけられる。回想や想起は、語り手と聞き手との共同作業として言わば「同じ方向」を向いて進められる。その際には、何が「重要な意味」であるのか、語り手が強調している点、何度でも話がそこへ戻っていく「記憶の回帰点」、や「記憶の基準点」などが解説される。例えば、「重要な他者（significant others）」の登場や重要な他者との関係性、現在の意味解釈枠組による重要性の認識などいずれもが「重要な意味」にかかわっている。

それに対して、自伝における時間の問題は、自伝執筆の意図や記述を始める時間とも関連しており、「信頼の欠如」ないしは「重要な他者の喪失」という「重要な意味喪失」につながっている場合もある。インタビューによる口述の生活史調査の場合には、このような「重要な意味喪失」という局面をすくい出すことにはかなりの困難が伴う。当然、最初の反応は「沈黙」であり、「語りたがらない」「はぐらかす」などの反応も予想される。インタビューの鉄則としては、「無理には聞かない」「感情を害させない」と言うことであるから、最終的にライフヒストリーからは「欠落」してしまうケースもあろう。自伝の場合は、自らが記述する意志をはっきり持っており、ある場合には「重要な意味喪失」を埋め合わせたいという欲求から書き始められる場合もある。

（２）記憶の欠落と語りの欠落

通常的生活史調査の中では、「記憶」の欠落は、すなわち「忘却」であり、語り手が思い出さない限りは、なかなか事実を埋めていくことが難しい部分である。もちろん、新聞、雑誌、文献などの文字資料や関係者からの証言など客観的資料に頼れるところは、生活史調査と言えども怠ることはできない。しかし、それでもなお、話者自身のその当時の状態や感情は語り手の記憶の中にしまわれているだけとも言える。したがって生活史調査の場合には、記憶の欠落は、ある意味では、代替不可能な調査上の困難となるのである。

しかし、記憶の欠落が意味するものが単なる「忘却」ではなく、ある種のトラウマや重要な意味喪失と関連している場合には、異なった問題が生じてくる。その場合には、本人自身が記憶の欠落を意識しており、そのことに「苦痛」すら感じている。したがって、「思い出そうとしても思い出せない」あるいは「思い出すこと自体が苦痛である」という感覚・感情をとまなう場合もある。児童虐待や恐怖体験、性的虐待などの心的外傷（トラウマ）の症例を多く扱っている精神家医のレノア・テアは、『記憶を消す子供たち』において、「診察室で長年にわたり、トラウマを負った子供たち400人ほどの話を聞き、慎重に記録していくうちに、なかには本当にトラウマとなった恐ろしい体験を『忘れる』子供がいるのに気づいた。子供時代の記憶、特に長年抑圧されていた記憶が成人後、大きく変形せずによみがえるかどうかについては、現在大きな論争になっている。問題は、長年埋もれていてよみがえった記憶はどこまでが正確かということだ。最近、過去に放置されたり攻撃されたりした記憶、さらには殺人事件の記憶までがよみがえったと主張する人が多

数、あらわれている。よみがえった記憶が正しいかどうか、精神医学や心理学の専門家の意見は驚くほど分裂している。」(Terr, Lenore 1994, [21-22頁])と述べている。このように、記憶の欠落が意味するものは、単なる「忘却」とは異なった「抑圧による喪失」の場合もあるわけである。

さらに「重要な意味喪失」におけるもう一つの問題は、「語り」の欠落という問題である。記憶がかすかに蘇ったとしても、どのように語ったらよいのか、言葉にできることと言葉にならない思いが錯綜しているわけである。クロード・ランズマン監督の映画『ショア』では、トレ布林カ、ヘウム、アウシュヴィッツなどのヨーロッパにおけるホロコースト(大量殺戮)の「生き残り証言」が上映時間9時間半というロング・インタビューから構成されているが、しかし、高橋哲哉も指摘しているとおり、ランズマンは<絶滅>の歴史について、実は「証言の二重の不可能性」から出発している。つまり、絶滅収容所でのホロコーストそのものの「痕跡の消失」であるばかりでなく、「生還者自身の側」での「物語ることの不可能性」でもあった。(高橋 1995, 23頁)映像では、しばしば「それを物語ることはできない」「だれもここで起こったことを想像することはできない」「そんなことは不可能だ」「だれもそのことを理解できない」「わたし自身、いまでも……」等々の言葉が聞かれるし、言葉に詰まり、感情だけがあふれてしまって、インタビューが中断される場面も多い。そして、高橋は「ランズマンが、それでもなお<不可能な>証言を証人たちに要求していくとき、証人たちが断片的に発するいくつかの言葉が、物語＝叙述としては挫折するまさにそのことを通じて、語りえぬものをかろうじて示唆しているように思われることである。」(高橋 1995, 29頁)と述べている。

すなわち、「語りの欠落」自身が「語り得ないながら語ることの重要性」を表現しているというわけである。このことは、自伝においても前述したように、「喪の作業」を通じた記述として十分にあり得ることである。しばしば、口述の生活史の場合には「語りに信を置く」立場とされ、逆に実証史学の場合には「重要なことは絶対に語られない」という立場に立つという、相反する立場がイデオロギーのごとくに双方を分断してきた。しかし、「語りに信を置く」場合にも、「語られないこと」の存在が<地>と<図>の関係にあるし、また「重要なこと」が語られないからと言って、断片的な「語り」を無視して言いわけではない。ライフヒストリーにおける記憶と時間の問題に引き付けて言うならば、「語り」そのものの時間や「語り得ぬもの」が断片的にでも語られるようになるまでの時間も大切である。¹⁰⁾

(3) アイデンティティの喪失と再生

記憶と「語り得ぬもの」との関係においては、一方では、高橋哲哉も強調しているように、戦争・歴史・政治などの「証言の重要性」が存在している。それに対して、記憶と語りと記述の微妙な関係は、他方ではアイデンティティの問題ともつながっている。ここでは詳述できないが、筆者がライフヒストリー調査を続行中の稲垣尚友氏という人物におい

ても、彼の20代後半から30代前半でのトカラ列島・平島での生活と体験は、その後20年近くたっても、まだある種の「こだわり」となって、彼のアイデンティティの「彷徨」とつながっている。¹¹⁾

すなわち、ライフヒストリーを語ること、あるいは自分史を書くことは単なる記憶や回想の「記録」だけにはとどまらない場合もあり得る。自分にとって「自分」とは何であったのか、あの時自分がそのように行爲したのは何故なのか、他者はどのように自分のことを考えていたのか、といった数々の疑問や記憶・回想が渦を巻いてきて、「語り」に対しても「記述」に対しても影響を与える。ある時は、痛恨の思いや悔恨によって語り得ない状態に陥ることもあろうし、まるで他者の行爲を眺めるように自分の過去の行爲や感情を客観的に回想する場合もある。そして、記憶や回想のレベルだけではなく、聞き手に対して「語り得ない」、あるいは「書き残すことはできない」という場合も多い。このように、ライフヒストリーのパースペクティヴは聞き手＝研究者に対してだけではなく、当事者に対しても「反省的(reflexive)」自己意識を覚醒させるのである。それは、話者や自伝の書き手のアイデンティティに対する何らかの「呼びかけ」でもある。前述した『ショアー』の例でもわかるように、「語られていること」だけが重要なのではない。「語られないこと」への「呼びかけ」が聞こえるからこそ、重要なのである。¹²⁾反省的自己意識から出発したアイデンティティの喪失と再生は、苦痛を伴う一種の「ドラマ」であるが、ライフヒストリーにおける「物語」はこの点に深く関係しているのである。

5. 結 語

ライフヒストリーにおける記憶と時間の問題について、生活史調査の場面、自伝における時間と記述、そして記憶と「語り得ぬもの」との関係性などを取り上げてきたが、要するに、「反省的自己意識」の再構成という時間と意味の重層性が問われているのである。ライフヒストリー研究は一方で「人生の意味」の探求でもある。人は伝記や自伝を読む際に、そこに自分とは異なる「人生」を発見しながら、自分と共通する「人生の意味」をも発見する。しかし、ライフヒストリーの再構成にあたっては、「語り」は<現在>という時間、<歴史>という時間、<ライフサイクル的な時間>など重層的な時間構造を伴っているし、また記憶と「語られないもの」という制約の上にも乗っている。聞き手と語り手の重層的な時間、語り手の記憶と回想の重層性、そして物語の構成におけるアイデンティティの重層性など、「私」という自己意識が幾重にも反省的に再構成されていくわけである。

そもそも「人生」そのものが「語り得ない」という「不可能性」の前提の上に、ライフヒストリーがあると逆説的に言った方がよいかもしれない。しかしそうであるならば、ある個人の「人生の意味」は、当事者しか理解できないものなのだろうか。必ずしもそうとは言えない。当事者にもわからない人生の意味も存在しているし、結局は生きているもの

には分からない「死」の意味も厳然と存在している。ライフヒストリーは決して「死」を語ることはできないが、それゆえに「人生の意味」とちょうど<図>と<字>の関係にある「死の意味」の問題へも「呼びかけ」られているのである。

注

- 1) 生活史研究について筆者は、今までに、その主題と方法のパースペクティブについて(有末 1983)、生活研究や生活学との接点について(有末 1984)、具体的な都市祭礼集団の文化的な生活史的モノグラフ(有末 1992b)、質的社会学としての方法論、調査論、データと分析論(有末 1992a)、<意味の社会学>や「意味学派」との関係性(有末 1993b)、そして、ライフ・ドキュメントとしての日記や作品について、ライフストーリーとの対比(有末 1988)やアイデンティティ論の観点(有末 1995a)から分析してきたし、移民研究と生活史についても日系人研究との関連(有末 1995b)で方法論的に検討してきた。
- 2) アメリカの人類学者クリフォード・ギアツは、イギリスの哲学者ギルバート・ライルの表現を借りて、「薄い記述」と「分厚い記述」の対比を示しながら、民族誌の記述の目的をこれらの中間に見いだそうとしている。(Geertz 1973)
- 3) 「自分史」という言葉は、色川大吉『ある昭和史—自分史の試み』(1975年)あたりが発祥とされている。自分史の現場や現状については吉澤輝夫編集『現代のエスプリ 自分史』(1995/9)が詳しい。他には、(小林 1995b; 色川 1992)なども参考になる。それに対して自伝研究の方は、日本では佐伯彰一『日本人の自伝』(1974年)以外には、あまり多くなかった。フランス文学を中心とした外国文学研究にまで目を広げれば、(Lejeune 1971; Spengemann 1980; 中川 1979; 石川 1989)などが参考になる。
- 4) 人類学者、ヴィンセント・クラパンザーノは、精霊と結婚したモロッコ人男性のかわら職人トゥハーミのライフヒストリーを著すなかで、語り手トゥハーミの「個人史的現実」と「自伝的真実」は区別されると述べている。「個人史のリアリティ」とは語り手が実際に経験したと思われることについての語りであり、外的に観察しうる一連の行動と対応している。これに対し、「自伝的真実」とは、おそらく実際には決して起こり得ないことだけれども、なお語りとしては真実であると見られるものである。(Crapanzano 1980)
- 5) 文化人類学を中心とした「個人中心的」(person-centered) 民族誌の研究動向と「伝記と人生の構造」などライフヒストリー研究については、(Langness, L.L. and G. Frank 1981) 参照。また、(佐藤郁哉 1984; 佐藤郁哉 1992; 西澤晃彦 1995)なども参照。
- 6) 中野卓の『口述の生活史』のもとになったインタビュー調査を録音したテープを聞き直し、これを文字化し、作品化のプロセスを分析した大出春江は「このまえがきによって、『口述の生活史』全体が問わず語りによって進行したと誤解される可能性もあるが、必ずしもそうではない。」(大出 1995, 88頁)として、語りの型を <問わず語り型>、<問いかけ語り型>、<中間型>の3つに分類した上で、「語りの流れ本位の表1でみると、<問わず語り型>が78、<問いかけ語り型>が24、<中間型>が25となっているので、<問わず語り型>は全体の61%を占め、問わず語りだけで作品が本当にできあがっているわけではないことを示している。」(大出 1995, 95頁)と述べている。
- 7) 岩井洋の「想起と語り」：ライフヒストリーにおける記憶をめぐって」(第66回日本社会学会大会テーマ部会「ライフヒストリー研究の理論的諸問題」：1993年10月10日 東洋大学)のレジュメによる。なお例えば、最近翻訳されたエリ・ヴィーゼルの自伝『そしてすべての川は海へ』(Wiesel 1994)のように、ヴィーゼル自身の「記憶の回帰点」がアウシュヴィッツ体験であるのは言うまでもないが、そこに「20世紀ユダヤ人の肖像」という<典型>が刻印される点も、共同想起の特色である。

- 8) 作品化の形態のバリエーションの一つとして、伝記や評伝においては、著者が時間軸を自由自在に設定してさまざまな工夫をこらすことができる。例えば、升本喜年は『女優岡田嘉子』において、序章で岡田嘉子が1992年2月に、モスクワ市で亡くなるシーンから書き始められ、第1章では、杉本良吉との「樺太越境」を入念に追い、そして第2章で「女優の坂道」として、生い立ちから記述されている。(升本喜年 1993) また、猪瀬直樹の『ペルソナ 三島由紀夫伝』においては、三島由紀夫を日本の官僚システムとの関係において理解していくために、樺太庁長官だった祖父の平岡定太郎からの系譜や官僚の父・梓との関係性を軸にして、三代前からの時間軸において三島をとらえている。(猪瀬直樹 1995) このように、「分厚い記述」としてのライフヒストリーの作品化においては、必ずしも、対象者の時間の流れに沿った記述がなされるとは限らないし、また、そのような著者の意図をも含む時間の重層性が表現されてくるわけである。
- 9) 自伝(auto-biography)と伝記は、生活史研究の上では本人自らが書いたものか、他者による記述かという単純な区別に基づいているが、作家や作品を論じる文学批評の世界では、自伝と小説の違いとして「自伝作家は作品の冒頭部で一種の「自伝契約」を結ぼうとする。つまり、弁明、解説、前置き、意図の表明など、読者と直接的なコミュニケーションを確立するための儀式をすべて演じるのである。」(Lejeune 1971, [21頁]) と言うように、「自伝契約」という概念使って論じられている。(Spengemann 1980; 小林 1992; 石川 1989、など参照)
- 10) 『ショアー』は、1974年より11年をかけて製作され、1985年に公開された、上映時間9時間半の映画である。(鶴飼・高橋 1995) また、江原由美子は「従軍慰安婦問題」が当事者によって語られるまでの「なぜ46年もかかったか」について、「記憶の政治学」という観点から説き明かしている。(江原 1995, 207-222頁)
- 11) 詳しくは(有末 1995 a)を参照。また、稲垣尚友氏自身が『青春彷徨』(1991年)『十七年目のトカラ・平島』(1995年)などで島への「こだわり」を語っている。
- 12) 高橋哲哉は、「ランズマンの言うように「『ショアー』はその存在において、その本質において、生還者たちについての映画ではなく死者たちについての映画である」とすれば、また『ショアー』の課題が、「いかにして死を映画にするか」ということであつたとすれば、死者たちの「生」や「言葉」を生還者たちの「生」や「言葉」をもって贖うことは決してできないはずなのである。」(高橋 1995, 36頁)と述べている。

文 献

- 有末賢 1983 「生活史研究の視角」『慶應義塾創立125年記念論文集法学部政治学関係』: 345-366頁
- 1984 「生活研究とライフヒストリー」川添登編『生活学へのアプローチ』ドメス出版: 49-68頁
- 1988 「生活史とく生の記録」研究 慶應義塾大学法学研究会『法学研究』61-1: 233-262頁
- 1992 a 「質的社会学としての生活史研究」『法学研究』65-1: 259-285頁
- 1992 b 「下町の生活世界—重層的都市文化への生活史的アプローチ」森岡清志・松本康編『都市社会学のフロンティア 2 生活・関係・文化』日本評論社: 197-222頁
- 1993 a 「生活史」森岡清美・塩原勉・本間康平(編集代表)『新社会学辞典』有斐閣: 832頁
- 1993 b 「<意味の社会学>と生活史研究」早稻田社会学会『社会学年誌』34: 61-74頁
- 1995 a 「彷徨するアイデンティティ」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂: 167-190頁
- 1995 b 「移民研究と生活史研究」柳田利夫編『アメリカの日系人—都市・社会・生活—』同文館: 229-256頁
- Crapanzano, Vincent 1980. *Tuhami*, Univ. of Chicago [大塚和夫・渡部重行訳『精霊と結婚した男—モロッコ

- 人トゥハーミの肖像ー』紀伊國屋書店、1991]
- 江原由美子 1995 『装置としての性支配』勁草書房
- Geertz, Clifford 1973. *The Interpretation of Cultures*, Basic Books [吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘充・板橋作美
訳『文化の解釈学』I・II, 岩波書店、1987]
- 稲垣尚友 1991 『青春彷徨』福音館書店
- 1995 『十七年目のトカラ・平島』梟社
- 猪瀬直樹 1995 『ペルソナ 三島由紀夫伝』文藝春秋
- 石川美子 1989 「自伝・自己描写・小説ー「わたし」をめぐるー」東京大学仏語仏文学研究会『仏語仏文学研究』3: 103-117頁
- 色川大吉 1975 『ある昭和史ー自分史の試み』中央公論社
- 1992 『自分史ーその理念と試み』講談社学術文庫
- 岩井洋 1992 「想起することと歴史をつくること」佐々木正人編集『現代のエスプリ298 エコロジカル・マインド』至文堂 (1992年5月): 195-202頁
- 小林多寿子 1992 「自伝のモデルとしての二つの『告白』」浦和短期大学『浦和論叢』8: 29-53頁
- 1995 a 「インタビューからライフヒストリーへ」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂: 43-70頁
- 1995 b 「自分史と物語産業の誕生ー1980年代の動向からー」『日本女子大学人間社会学部紀要』5: 89-108頁
- Langness, L.L. and Gelya Frank 1981. *Lives: An Anthoropological Approach to Biography*, Chandler & Sharp Publishers. [米山俊直・小林多寿子訳『ライフヒストリー研究入門』ミネルヴァ書房、1993]
- Lejeune, Philippe 1971. *L'autobiographie en France*, Armand Colin Editeur [小倉孝誠訳『フランスの自伝ー自伝文学の主題と構造ー』法政大学出版局、1995]
- 前山隆編 1986 『ハワイの辛抱人ー明治福島移民の個人史ー』御茶の水書房
- 升本喜年 1993 『女優 岡田嘉子』文藝春秋
- 中川久定 1979 『自伝の文学ールソーとスタンダールー』岩波新書
- 中野卓編 1977 『口述の生活史ー或る女の愛と呪いの日本近代ー』御茶の水書房
- 編 1983 『日系女性立川サエの生活史』御茶の水書房
- ・桜井厚編 1995 『ライフヒストリーの社会学』弘文堂
- 西澤晃彦 1995 『隠蔽された外部ー都市下層のエスノグラフィーー』彩流社
- 大出春江 1995 「『口述の生活史』作品化のプロセス」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂: 71-108頁
- 佐伯彰一 1974 『日本人の自伝』講談社文庫 (1979)
- 佐藤郁哉 1984 『暴走族のエスノグラフィー』新曜社
- 1992 『フィールドワーク』新曜社
- 佐藤健二 1984 「社会分析の方法としての『新しい歴史』」東京大学教養学部『社会科学紀要』33: 13-41頁
- Spengemann, W.C. 1980. *The Forms of Autobiography*, Yale University [船倉正憲訳『自伝のかたち』法政大学出版局、1991]
- 高橋哲哉 1995 『記憶のエチカー戦争・哲学・アウシュヴィッツー』岩波書店
- Terr, Lenore 1994. *Unchained Memories*, Basicbooks, New York = 1995 [吉田利子訳『記憶を消す子供たち』草思社、1995]
- 鶴岡哲・高橋哲哉編 1995 『『ショアー』の衝撃』未来社
- Wiesel, Elie, 1994. *Tous Les Fleuves Vont A La Mer*, c/o Geroges Borchardt, [村上光彦訳『そしてすべての川

三田社会学創刊号(1996)

は海へー20世紀ユダヤ人の肖像ー(上)(下)』朝日新聞社、1995]

吉澤輝夫編 1995 『現代のエスプリ 338 自分史』至文堂 (1995年9月)

(ありすえ けん 慶應義塾大学法学部)